

ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書

京都大学文学部地理学専修三回生 大友葵

今回の研修では、ハイデルベルク大学・ストラスブール大学の大学施設の見学、両大学の学生とのワークショップ、それぞれの街の見学が行われた。

ワークショップはハイデルベルク大学では英語で、ストラスブール大学では日本語で行われたが、ほとんどネイティブに近い英語を完璧に聞き取ることは難しく、議論の中で理解が追い付かず、自らの英語力の低さを目の当たりにした。ある文化を理解するには現地語を用いることが理想だと考えるが、その前段階のコミュニケーションの共通言語として英語の重要性を身をもって知ることが出来た。

ストラスブール大学でのワークショップの翌日には、ストラスブール大学日本語学科の学生と共にストラスブールに拠点を置く欧州議会を訪問した。欧州議会では、職員の方から直接お話を伺い、ホームページを読むだけでは知ることの出来ない貴重な内容を伺うことができた。

今回の研修の大意からは逸れてしまうが、今回訪れたストラスブールとハイデルベルク両地域の交通事情が興味深かった。両地域とも歩行者用通路、自転車用通路の区別が明確にされ、かつそれが順守されていたことが印象的であった。日本でも自転車用通路は存在するが、まばらであり、歩行者も自転車もその標識をほとんど意識せずに通行している。また、ストラスブールは路面電車（トラム）が主要な交通機関となっており、さらに、郊外に駐車しトラムで街中に入るパークアンドライド方式も導入されている。そのおかげで街中に車が渋滞する様子は見られなかった。

文化というと、宗教といった精神的な要因が第一に浮かぶが、上記の様な交通事情も人々の生活様式を変えるとすれば文化の担い手といえると考えた。

また、ハイデルベルクとストラスブールではホテルの設備に大きく違いがあった。ハイデルベルクでは日本のビジネスホテルと似たような設備とアメニティであったが、ストラスブールではフランスの本質主義を反映しているのか、シャワー室は畳半分もなく、エレベーターも非常に狭かった。ドイツと国境を接する地域でも様式の違いは明らかであり、国境が意識された。

一口に文化といっても、どの観点から見るか、どの範囲で捉えるかによって文化のくくりは変化するのだと改めて実感した。それと同時に、文化越境という言葉も人によって様々であろうと再認識できた。